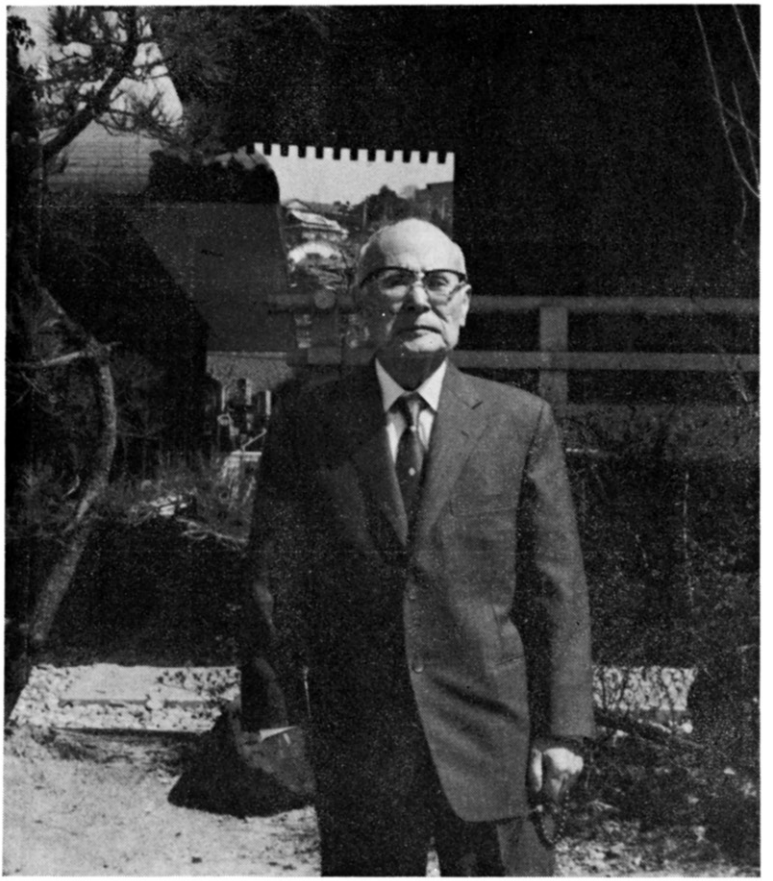
大沼法龍著

八万四千の法門は一字に摂まる

敬行寺発行



真如堂，本堂を背にして（昭和50年3月16日影）

開入本願大智海
帰入功徳大宝海
遊煩悩林現神通

聞　名号

如実信後真実他力

真物本体験物深実戦心

自力権仮方便

不信前如実

浅心演習点合

真似物

本願海←大智海←光明の海

海苦の死生←海悩煩←海明無

華厳

法華

涅槃

一念

信機
信法

二種一具

雑行、諸㕝万行、六度万行。
十九願　観経
自力の中の自力

雑修、五種正行間雑。
二十願　小経
他力の中の自力

自力の心、信罪福心、定散心。

疑惑佛智、凡智、機法合体。

明信佛智、佛智、機法一体。

捨身の行（自力の心）

同類の助業（雑修）

佛恩報謝

異類の助業（雑行）

正行、専修

十八願　大経

他力の中の他力

はしがき

彌陀の本願は四十八願であるけれども、摂生の願といって、衆生を摂取し往生さすという願が三願あります。

第十八願が「至心信楽の願」といって、絶対他力の願でありますが、凡夫は久遠劫からの自力の執着を離れきらないから、その機態を調整し養育するために、真実の願に入るにはこの方便の願を修してきなさいと、第十九願の「修諸功徳の願」を立て、自力の行を自力の心で励まし、さらに第二十願に「植諸徳本の願」を立て、他力のなかの自力で照育し、遂に他力のなかの他力の第十八願に誘導してあるのです。

その願の真意を領受して、釈尊はこれを三部経に説かれたのであります。第十八願の開説が大経、第十九願の開説が観経、第二十願の開説が小経で、方便から真実に調機誘引するのが釈尊の説法であります。

その真意を実行して、大満足の境地を諦得して開宗されたのが、浄土真宗であります。

化土巻に「是を以て愚禿釈鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勧化によりて、久しく万行諸善（第十九願の観経）の仮門を出でて永く雙樹林下の往生（化土）を離れ、善本徳本（第二十願の小経）の真門に廻入して、偏に難思往生（化土）の心を発しき、然るに今特に方便の真門を出でて選択の願海（第十八願の大経）に転入せり、速に難思往生の心を離れ、難思議往生（報土）を遂げんと欲す、果遂の誓ひ良に由ある哉」

観念の遊戯や机上の空論をしている人は、実機を包んで智恵や学問や感情で「なるほど、なるほど」と通っているから、すぐに理解できるけれども、実地問題になったらそう簡単にはいきませんよ。ご飯を頂いたら満腹する、薬を呑んだら全快する、難破したときには救助船で助かる、演習のときは敵は戦友、弾は空砲、勝っても負けても万歳ですが、実戦のときは、そう簡単に笑うて通れるものではありませんよ。

みなさんは、後生が一大事になりましたか。地位も名誉も財産も、親子兄弟から見送られて、担いきれない業を担うて次の世界に行くのですが、用意ができましたか。「仏さまがご承知だ。」それでは仏さまに遇いましたか、助かりましたか。「死んだらお助け。」それなら、生きている間は助かってはいないのですよ。それでは親鸞聖人の平生業成になっていないから、浄土真宗ではありませんよ。食べましたか、満腹しましたか、一念の関所の喉の関門を通っていなくては、身体全体にご飯粒を塗っていても、血とも肉ともなりませんから、報謝の活動にはなりませんよ。醍醐の妙薬の薬を呑みましたか、無明業障の恐ろしい病が全快しましたか、三世の業障が一時に罪が消えるのですが、消えましたか。今が生死の苦海で時化に逢い、恨みと呪いで難破していますが、大悲の願船に救助されましたか。元気で達者で、死を千年先に考えておられる演習のときはよかったが、臨終が迫った実戦となったら、トーチカ、クリーク、塹壕、地雷、思わぬところに自力の伏兵がいて、一歩も進めなくなりますよ。そ

れを難中の難というのですよ。それを突破さしていただくには「大千世界に満てらん火をも過ぎ行きて聞く」覚悟がなくてはならないのですよ。その激戦の終わった後の万歳は広大難思の大慶喜で、他力無力に腰を掛け、何にも貰わずに、死んだらお助けを夢見ている人の想像のできない世界ですよ。

◎　◎

聖人は、自分が三願を転入して光明の広海に浮かばれた広大無辺の世界に驚き、我執の捨たらない、内外の学者知識に対し、また同行の人たちに対して厳しい批判をなさったのが、次の文です。

「夫れ以れば信楽を獲得することは如来選択の願心より発起す。真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり、然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し」

「諸寺の釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷ふて邪正の

道路を弁ふることなし」

このご文は、八家九宗の学者たちに対する鉄槌かと思ったら、素直に聞いていると思っている浄土真宗の道俗に対する警告でありますよ。実地に求道し体験を語る人が一人もなく、真仮の分際を学問のうえでなく、実地の体験のうえで指導してくださる方がひとりもなく、三願転入で自分が求道した実地問題を語る人が一人もない、それで聖人の衣鉢を受けたといえるでしょうか。

◎　◎

聖人の特徴を何と心得ておられるのでしょうか。真仮の分際を選別し、信前信後の水際を鮮やかに諦得するように指導するのが、特徴のなかの特徴ではありませんか。『歎異鈔』の終わりにも「おほよそ聖教には、真実権仮ともにあひまじはりさふらふなり。権をすてて実をとり仮をさしおきて真をもちるるこそ聖人の御本意にてさふらへ、かまへて〳〵聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ」と丁寧親切に指導して

あるのに、権実真仮を分別して教えてくださる人が一人もない。

念仏といえば、みな第十八願の他力廻向の念仏と思われようが、万行随一の念仏は第十九願の念仏であり、万行超過の念仏は第二十願の念仏であり、自然法爾の念仏が第十八願の念仏であることを、指導する知識が知らないのだから、指導される同行の知る筈がないのですよ。しかも、誰もみな法の尊さを眺めている第二十願の他力のなかの自力の念仏ですから、念相続ができないのです。

念仏がみな十八願の念仏と思っておられるのは、方便と真実との分別を知らないのですから、彌陀の本願の真仮を弁えない、釈尊の方便と真実とを知らない、聖人の三願転入の趣旨を知らない、贋坊主、贋同行といわねばなりません。

曇鸞大師の上には「三不三信の誨」が詳しく説いてあり、善導大師の上には「専雑の得失」が書いてあり、蓮如上人の上には、「もろもろの雑行雑修自力の心をふり捨てて」と教えてあるけれども、読んで通るだけで、机上の空論だけで、実地に求道し

たことがないから気にもかからないのだ。そんな道俗を、素直に聞いているから真実報土に往生すると思ったら、物を知らないのにも程がある、それが浄土真宗の宗旨としたら、聖人はお泣きなさいますよ。「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」と仰せられたが本当だ。当局の方がたが、実地の求道をしたことがないから、実地の求道の難中の難を通っていないから、自力の機執の晴れた人がない、十方法界を全領した大慶喜がないのだ、凡智がつきて仏智に生かされた体験がないから、真仮の分際、信前信後の水際が説けないのだ。

『浄土和讃』でも『観経和讃』でも読んでごらんなさい。みな方便から真実に入るように書いてありますよ。

念仏成仏これ真宗　　万行諸善これ仮門
権実真仮をわかずして　　自然の浄土をえぞしらぬ。
聖道権化の方便に　　衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる　悲願の一乗帰命せよ。
定散諸機各別の　自力の三心ひるがえし
如来利他の信心に　通入せんとねがふべし。

『二巻鈔』には、

「ひそかに観経の三心往生を按ずれば、これすなわち諸機自力各別の三心なり。大経の三信に帰せんがためなり、諸機を勧誘して、三信に通入せしめんとおもうなり」。

自分は始めから、第十八願の真実の道俗じゃと自惚れているのだから、方便を通って真実に通入するのだと教えても、自分とは無関係だと思っているのです。

方便の桁にいる間は、絶対に方便の桁にいると思わないのが方便の桁の人です。真実に入ってこそ、いままで方便の桁にいたと知らされるのです。迷いを迷いと知らないのが迷いです、馬鹿を馬鹿と知らないのが馬鹿です。

◎　◎

人間は誰でも、自分の信仰は真似で贋物、とは絶対に思ってはいない。本人はその程度しか進んでいない、因縁がないのだから、みなこれが本当だと信じて進んでいるのです。だから比較して見せると、どうも判然せん、も少しは喜ばれそうなもの、これでよいかしらと自分の心を見るようになるのが信仰が前進しているので、それを調機誘引といい、慈悲方便といい、果遂の誓いのうえを前進しているというのです。

始めから本物はいないのです。真似から真実に進み、贋物から本物になり、方便から真実に誘導され、合点から徹底するまで進み、若存若亡から金剛心を諦得し、自力の浅心から他力の深心に赴き、権仮から真実に養育せられ、曖昧な信仰から決定心が確立し、信前から信後に送られるのです。これを調機誘引といい、従仮入真というのです。

自分の信仰が本当だと自惚れつつ、一歩一歩照育されているのです。言葉でなけれ

ば導かれないが、言葉に執われていては、真理は諦得できませんよ。私の進んだ程度で方便と真実とを分別して見せますから、自分はどの程度にいるか、参考にして信仰を進めてくださいよ。

彌陀、釈迦、聖人の三尊に方便と真実とが分けてあるのですから、皆さんの信仰のうえに信前と信後が分かれているのですが、深いことは知らずに、名号に向いておれば助かっているように自惚れているのを、今ここでは浄土仮宗と名づけ、名号と一体にさしていただいたのを浄土真宗として、比較して見せますよ。

1　浄土仮宗
2　第十九願と第二十願の桁の人々
3　素直に聞いていると自惚れている
4　十劫の昔に助かっていることを知

1　浄土真宗
2　第十八願の行者
3　素直にない心に驚いて求道した人々
4　いま助かっていないことに驚いて

らなんだ。

5 法体成就の機法一体を喜ぶ。

6 死んだ先のお助けを悦ぶ。

7 機を見る必要はない。

8 凡夫は慶べるものではない。

9 凡夫は晴れられるものではない。

10 疑惑仏智の人。

11 凡夫には満足はない。

12 信仰は何時とはなしに頂く。

13 機を見るものは異安心。

求道した。

5 信念冥合の機法一体を喜ぶ。

6 この世で助かったことを悦ぶ。

7 この機が出て行くのだ、見ずにいられない。

8 凡夫が慶ばなくて誰が慶ぶのだ。

9 晴れられないのなら聞く必要がない。

10 明信仏智の人。

11 晴れて大満足がある。

12 信仰はたのむ一念のときに頂く。

13 機をよう見ないものは無安心。

14 求道するのを自力と思っている。

15 信仰に水際のある筈がない。

16 法を眺めているのだから満足がない。

17 どうもはっきりせん。

18 自分は自力をおこしたことはない。

19 自分は疑うたことはない。

20 後生が一大事になっていない。

21 話のわかったのが信仰と思う。

14 火の中を分けて求道した。

15 凡智がつきて仏智に生かされたのだから水際がある。

16 仏智が満入したのだから満足がある。

17 今こそ明らかに知られたり。

18 自力がなければ他力まで進まれない。

19 晴れていないのが疑いと知らないのだ。

20 寝食を忘れた一大事になった。

21 開発したのを信仰と思う。

22 合点したのを信仰と思う。
23 信仰の難中の難を知らない。
24 この人世を苦悩の世界と見る。
25 称名は忘れ勝ち。

このくらいにしておきましょう。あなたは上段の方に賛成しますか、下段の方が味がありますか。学者や学生は、学問として方便の願は十九願と二十願、真実の願は十八願と勉強はしておいでになるでしょうが、信仰のうえで方便の二願が信前であって、十八願が信後とお考えになったことはありますまい。はじめの二願が雑行雑修で、しかも自力の心や疑いの心を離れていないから化土往生、あとの一願は正行専修だから、自力や疑いが離れているから報土往生、と信仰のうえで区別、水際が立たないでしょう。真宗の流れを汲んでいるものは、みな十八願の行者と決めておいでになるから、少し詳細に語れば、みな異安心に見えるのですよ。

22 体験したのを信仰と思う。
23 信仰の易中の易を受得。
24 この人世を無上最高の世界と見る
25 忘れ勝ちを思い出し勝ち。

実地の求道をさしていただかなければ、自分の実機の秘密の部屋は見えません。本性の逆謗の屍が照らし出され、若不生者不取正覚の親の念力と一体にさされて機法一体、仏凡一体になったときでなければ、唯信独達のたのむ一念は体験はできません。それを突破さされたときを「娑婆の終り臨終と思え」といわれ、「これを知らざるを以て他門とし、これを知れるをもって真宗のしるしとする」といわれたので、この一念の味のわからない人は浄土真宗の道俗ではありません。この一念を諦得した人が凡智がつきて仏智に生かされたから、真仮の水際が鮮やかに説けるのです。

同じことを繰り返し繰り返し語っているのは、まだ眼が醒めないか、もう覚めてもよいだろうにと遣る瀬なく思うからです。

◎　◎

十劫已来立たしても、八千遍の苦労をおかけしても、素直に聞いていると自惚れているお方だから、手間のかかるのは仕方がないが、聖人のお言葉を挙げてみましょう

か。

「悲しい哉、苦障の凡愚、無際より已来助正間雑し、定散心雑るが故に出離其期なし、自ら流転輪廻を度るに微塵劫を超過すれども仏の願力には帰し難く大信海には入り難し、誠に傷嗟すべし、深く悲歎すべきなり。凡そ大小聖人一切の善人、本願の嘉号を持って己が善根とするが故に、信を生ずること能はず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能はざるが故に報土に入ることなきなり」と、何にも聞かずに流転するのなら当然であるけれども、教を聞きながら、念仏を称えながら、自力の機執が捨たらないために、空しく流転をつづけているとは情けないではないかと、聖人を苦しめているのですよ。

何卒、智者や学者や学生や求道者よ!!　空に邪魔物はなくても、脚元に雑行も雑修も、自力も疑いも地上にあることを忘れないでくださいよ、法の尊さを仰いでいるのは方便の桁ですよ、機が救われたときが真実の桁に入ったのですよ。死んでからでは

なく、平生業成が浄土真宗の据りですよ。この人世こそ、光明の輝く現当二世の最上無上の世界とならねば、如来の廻向が空手形になりますよ。

◎　◎

宿善まかせとは言いながら、こんな広い天地、幸福な境地があるのに、なぜ求道されないのだろうか。苦悩の世界におりながら、満足しきって一切が拝める、感謝の世界があるのですよ。早くお念仏を称えなさい、信仰に生きてください、この人世が光明の広海となるのですよ。